



UNEP/SETACライフサイクルイニシアチブ によるフラッグシップ・プロジェクト 「組織のLCA」の概要

Dr. Julia Martínez-Blanco

国際ワークショップ「スコープ3と組織のLCA」
2013年11月21日- 東京

UNEP/SETAC ライフサイクルイニシアチブ



ベルリン工科大学
環境工学部
持続可能工学

<ご留意事項>

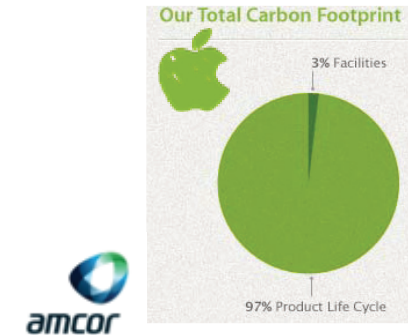
- 本資料は、「国際ワークショップ “Scope3と組織のLCA”」(2013年11月21日)におけるJulia Martínez-Blanco氏(UNEP/SETACライフサイクルイニシアチブ)の「UNEP/SETACライフサイクルイニシアチブによるフラッグシップ・プロジェクト」を、みずほ情報総研株式会社が仮訳したものです。
- 本資料の利用に際しては、翻訳に関する二次著作権の扱いを含め、お取扱には充分ご注意ください。

- フラッグシップ・プロジェクト
 - 動機及び目標
 - 概要
 - 協カメンバー

- ガイダンス文書(WD2)
 - ガイダンスの調査範囲
 - 組織のLCAとは何か
 - 実施方法及び目標
 - 継続中の議題

- 重要な事実

- 組織レベルでなされる意思決定は環境成果の形成に重要な役割を果たす。
- サプライチェーンにおける影響の割合(%)は高い。



- 最近までライフサイクル思考では組織的アプローチが注目されていなかった（GHGプロトコルなど、他の手法も同様）。
- ライフサイクルアプローチの便益と可能性は、製品への適用に限定されない（要求事項の90%は移行可能）。
- トレードオフを回避するためには、複数の影響の評価が必要である。
- ISO/NP TS14072「環境マネジメント—ライフサイクルアセスメント—ライフサイクル思考の組織への適用に関する要求事項及び指針」

⇒ 主な目標:

本プロジェクトの主な目標は、ライフサイクルアプローチの便益と潜在的 가능성이、製品への適用に限定されるものではなく、組織への利用が、適切で、有意義で、既に実現可能であることを
を
実証することにある。

さらに、本プロジェクトは、組織のLCA(O-LCA)の適用を容易にし、方法論における課題への支援を提供することも目的としている。

プロジェクトの承認: 2013年4月 予定期間: 3 年間

3つの参加者グループ:

- 関心のある団体の募集: 2013年6月
- 設立 (2013年7月): 共同ドラフト執筆者 (WG)、フィードバック・ステークホルダー、及び事例提供者

現在の状況:

タスク1: ドラフトガイダンス文書 (委託されたWG) の期限は2014年初頭

- WD1: 箇条書ドラフト 2013年9月4日
- WD2: 暫定ドラフト 2013年10月25日 (60 ページ)
- 第1回会合: 2013年11月22~23日 (日本)

今後の予定:

タスク2: ガイダンス統合文書の期限は2014年12月

タスク3: ロードテストガイダンスの期限は2015年12月

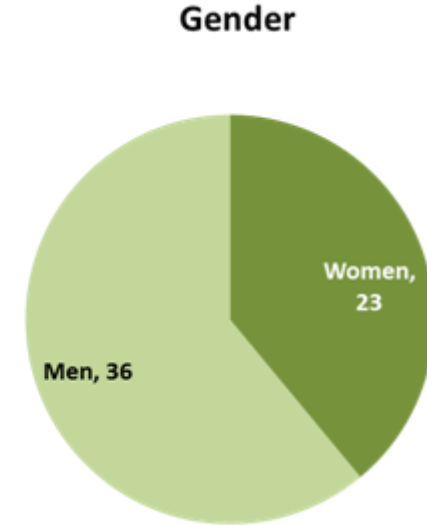
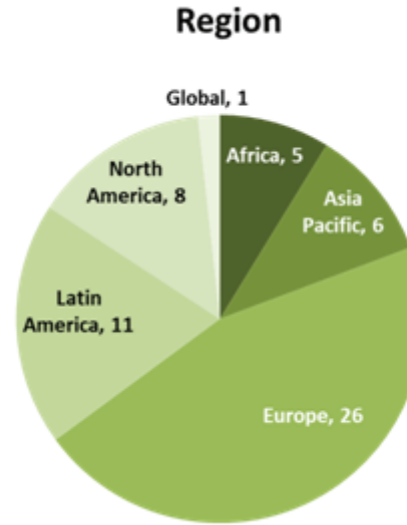
推進グループ:

- 稲葉敦、工学院大学教授(共同リーダー)
- Matthias Finkbeiner、ドイツ、ベルリン工科大学教授(共同リーダー)
- Julia Martínez-Blanco、ドイツ、ベルリン工科大学教授(事務局)
- Sonia Valdivia、国連環境計画(UNEP)グローバル
- Llorenç Milà-i-Canals、UNEPグローバル
- Ana Quiros、ECO GLOBAL & ALCALA、コスタリカ

本フラッグシップ・プロジェクトへの 協力者の合計数

協力形態	人数
共同ドラフト執筆者(WG)	20
フィードバック・ステークホルダー	38
事例提供者	14
合計	59

フラッグ
シップ・
プロジェクト



WG



- フラッグシップ・プロジェクト
 - 動機及び目標
 - 概要
 - 協カメンバー

- ガイダンス文書(WD2)
 - ガイダンスの調査範囲
 - 組織のLCAとは何か
 - 実施方法及び目標
 - 継続中の議題

- 重要な事実

- ライフサイクル思考における組織的観点の可能性に焦点
- 環境パフォーマンス(社会のLCA(S-LCA)の可能性)
- 方法論に関する難しい課題についての提案
- 国際的に認可されている既存のガイド、手法、規格に基づく
 - ⇒ 特に、今後発表されるISO/NP TS14072に沿って規定する。
- 全ての経済又は制度のセクター／レベルにおける、あらゆる規模の官民両方の組織が対象。
 - ⇒ O-LCAに関する4つの実施方法
- 異なる組織間の比較は意図していない
 - ⇒ パフォーマンス・トラッキング(継続的な改善を進める)

O-LCAが対象とするのは・・・

- 調査対象: 組織
- 調査範囲: 全ライフサイクル
- 対象カテゴリ: マルチクライテリア評価

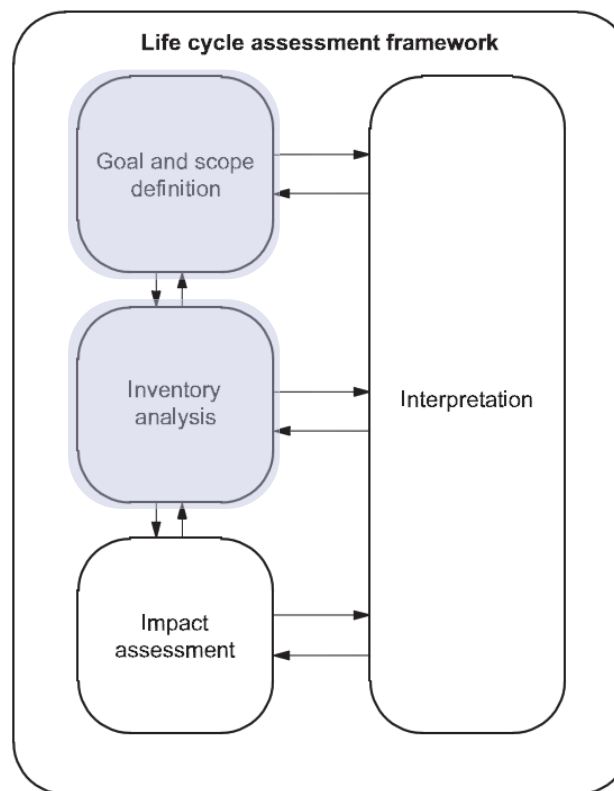
O-LCAアプローチは、特性が全く異なる組織(部門、規模、構造など)に対して、また非常に幅広い状況において適用することができる。以下に組織の事例を挙げる。

- 以前は環境マネジメントツールを実施していなかった(又は限定的であった)。
- 既に幾つかのEMSを採用している(環境、パフォーマンス、gate-to-gate)。
- 既にポートフォリオ内の幾つかの製品・サービスにLCAを適用している。
- 以前はGHG排出量のスコープ3基準を適用していた。

O-LCAによる組織の目標例

- ホットスポットの特定
- リスク及び影響の軽減機会の把握
- 戦略的決定のサポート
- 移動した環境影響の特定
- EMSの補完
- サプライヤー間の環境マネジメントの促進
- ...

O-LCA ガイダンス(WD2)は、今後発表されるISO/NP TS14072(現在はWD4)から引用された箇所が多く、製品LCA基準やその他の組織の規格の原則や要求事項にも依拠している。



- 調査範囲の段階構造及び要求事項
- 専門用語（O-LCA、報告／参照単位、システム境界など）
- 報告フローを表すための代替物（単位、通貨、ポートフォリオなど）
- サービスセクターの報告単位及び報告フローの設定
- 組織の一部を評価（提案）
- 組織のシステム境界をどこに設定するか（gate-to-gate、Tier 1など）
- 実施方法（調査範囲の設定やデータ収集についての固有の提案）。
組織のLCAには、「画一的な（one-size-fits-all）」アプローチは存在しない。
- O-LCAにおけるサプライヤーのデータ（購入比率）と製品レベルのデータ間の
インターフェイスをどのように対処するか。

- フラッグシップ・プロジェクト
 - 動機及び目標
 - 概要
 - 協カメンバー

- ガイダンス文書(WD2)
 - ガイダンスの調査範囲
 - 組織のLCAとは何か
 - 実施方法及び目標
 - 継続中の議題

- 重要な事実

- 組織レベルでは、環境成果の形成において果たす役割が大きい。上流段階（サプライヤー）の環境影響の方が大きい場合が多い。
- 製品のLCAの要求事項は、組織評価にも適用されうる。
- 製品のLCAとの主要な差異は調査範囲の設定である（比較可能性）。
- 今後2年半で新たなガイドラインを作成しロードテストを行う予定の本フラッグシップ・プロジェクトには、60名弱が参加している。
- 同ガイダンスの目標は、O-LCAアプローチの可能性を指摘し、有益となりうる状況を示し、方法論の難しい課題に対応することである。
- 幾つかの継続中の議題（殆どが方法論に関するもの）。

ご清聴ありがとうございました。

<http://www.lifecycleinitiative.org>

Dr. Julia Martínez-Blanco
julia.martinezblanco@tu-berlin.de



ベルリン工科大学
環境工学部
持続可能工学